

第40回世界獣医師会大会（WVAC2025）に参加して

東京都芝浦食肉衛生検査所

飯島 佑理

令和7年7月18日から22日にかけて、アメリカ合衆国ワシントン・コロンビア特別区（ワシントンD.C.）で開催された第40回世界獣医師会大会（World Veterinary Association Congress: WVAC 2025）に参加いたしました。大会を通じて貴重な経験を得るとともに、多くの学びがありましたので、ここにご報告申し上げます。

私は「牛のと畜検査に関するデジタル教材作成の試み」という演題で発表を行いました。発表内容の多くは、前任の職員の方々が築き上げたものであり、自分が世界獣医師会大会で発表することに対して不安や戸惑いもありました。しかし、周囲の皆様の励ましを受け、参加を決意いたしました。

演題登録の際には、口頭発表またはデジタルポスター発表のいずれかを選択できました。拙い英語での口頭発表よりも、ポスター形式の方が内容を的確に伝えられると考え、デジタルポスター発表を選びました。当初は、1枚のポスターを作成し、現地ですその前に立って質疑応答を行う形式を想定していましたが、実際には「スライドショーや発表の様子を10分以内の動画にし、会場のモニターで上映する」というものでした。形式の詳細が発表されたのはデータ提出期限の約1か月前で、翻訳ソフトを駆使しながら何とか動画を完成させました。作成には苦労しましたが、ロストバゲージの心配がなく、安心して出発することができました。

日本からは、世界獣医師会大会ツアーが企画されていたため、そちらに参加しました。ワシントンD.C.の街並みは美しく、公園や緑地が多く、昼間に一人で歩いていても特に不安を感じることはありませんでした。到着初日にはホワイトハウスやリンカーン記念堂を巡りました。気温は約34℃と日本と変わりませんが、非常に日差しが強く、長時間のフライト後の身体には少々堪えるものでした。

今年の大会は、ウォルター E. ワシントンコンベンションセンターにて、アメリカ獣医師会大会と併催されました。大会の公式アプリを活用することで、スケジュールやテーマから聴講したい講演を選び、自身の予定表を作成することができました。また、デジタルポスターの質疑応答はアプリのメッセージ機能を通じて行われるため、発表者は質疑応答のためにポスターブースに滞在する必要はなく、他の講演を聴講できる仕組みとなっていました。

デジタルポスターのブースは、多くの企業ブース

が並ぶホール内に設置されていました。ブースには4台の液晶モニターが設置され、毎日多くの方がポスターを視聴されていました。私のポスターを視聴している方を見かけた際には、関心を持っていただけたのかと嬉しく感じました。

講演の聴講に際しては、スライドの内容は自力で理解し、話されている内容はアプリの同時翻訳機能に頼って臨みました。発表は硬い雰囲気ではなく、授業やセミナーを受けているような感覚で、プレゼンテーションの巧みさに感動しました。講演内容は、分野を問わず、ワン・ヘルスに関連する広範なテーマが多かったことに驚愕しました。世界の獣医師が持つ広い視野に触れることで、自身の視野の狭さを改めて痛感する機会となりました。

最終日の夜にはライブハウスでのライブがあり、その後、埠頭のステージで閉会式が行われました。アメリカ獣医師会会長、次回大会開催国である日本獣医師会の藏内会長、小池東京都知事が登壇されました。非常に恐縮ながらも、ご挨拶とともに写真を撮っていただき、会期中で最も緊張した瞬間となりました。小池都知事はワン・ヘルスについて触れながら、2026年東京大会に向けたスピーチをされました。最後に藏内会長の挨拶の後、花火が打ち上げられ、盛大に閉会となりました。

最後に、今回このような貴重な体験をさせていただけたのは、全国公衆衛生獣医師協議会の皆様、職場の皆様をはじめ、関係者の皆様のご理解とご協力のおかげです。この場をお借りして、改めて深く感謝申し上げます。今回得た学びと経験を、今後の業務に活かしてまいりたいと存じます。



【デジタルポスターブース】
ホールの開場時間内であれば、参加者が見たい動画を選択し、いつでも視聴可能。左の方は、私のポスターを視聴中。



【閉会式】
会場内は大会参加登録者のみが入れるようになっていた。ステージではライブ演奏や、和太鼓が披露され、常にイベント感に溢れていた。